



同窓生が語る 宮澤賢治

盛岡高等農林学校と松田甚次郎・宮澤賢治（5） 「百姓賢治」と「百姓甚次郎」の農民運動



若尾 紀夫 (C昭39・院41)

「百姓賢治」の農民運動： 「本当の百姓」になりたい

農学校教師を辞任

大正15年3月31日、賢治は4年4ヶ月勤めた花巻農学校を依願退職し、4月1日から下根子桜の別宅で独居生活を始めた。

「この4ヶ年は わたくしにとって じつに愉快な明るいものでありました。」(1)、「この4ヶ年が わたくしにどんなに楽しかったか わたくしは毎日を 鳥のやうに教室でうたってくらした 誓って云ふが わたくしはこの仕事で 疲れをおぼえたことはない。」(2)と回想している。

このように教師生活は楽しく充実したものであったという。それにも関わらず賢治はなぜ農学校をやめたのか。

「本当の百姓」になりたい。

賢治は、農学校の生徒達に常日頃「農村に帰れ、農民になれ」と語っていた(24)。それは「農学校教育の目的は自営農民を育成することである。」との考えによるものであった。しかし賢治は安楽な教師をしている「中ぶらりん」の自分の立場に矛盾と葛藤を感じ、「百姓を指導するにはみずからも百姓をしなければならない。」「本当の百姓」になりたいとの思いを抱いていた(4, 11, 13)。

賢治は退職1年も前(大正14年)に、教え子らに「来春はやめてもう本当の百姓になります。」と教師辞任を伝えていることから、賢治は何時までも農学校に留まるつもりはなかったことがわかる。

沢里武治宛の手紙[書簡260(昭和5年4月4日)](4)で、賢治は「・・・こんどはけれど半人前しかない百姓でもありませんから、思い切って新しい方面へ活路を拓きたいと思います。期して待って下さい。・・・私も農学校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに倨傲な態度になってしまっ

たこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです。もう一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたいとばかり考へます。」と述べている。

このように農学校を辞めるときに、賢治は「思い切って新しい方面へ活路を拓きたい。一度新しい進路を開いて幾分でもみなさんのご厚意に酬いたい。期して待って下さい。」と心境を語っている。

では賢治が言っている「新しい方面」「新しい進路」とは何か。具体的なことには触れていないが、「本当の百姓」になることか。では賢治にとって「本当の百姓」となにか。

下根子桜での独居農耕生活

花巻農学校辞任後、賢治は大正15年4月1日から下根子桜の別宅に移り農耕生活を始めた。

建物周辺の空地に花壇をつくり、ヒヤシンス・ユリ・チューリップ・グラジオラス・カンナなどの草花を栽培。また北上川岸の荒地を独りで開墾し、トマト・キャベツ・カブ・白菜・大豆・セロリ・パセリ・ゴボウ・アスパラガス・メロンなどの野菜を栽培し、一部トウモロコシ・ジャガイモも植えた。トマトやキャベツなどは毎朝リヤカーに積んで村の人たちに無料で配って歩いたという(10, 13, 28)。しかし賢治自身は小作人らしい作物や主食である米の栽培を手がけることはなかった。

ところで豊沢町の宮澤家の土蔵裏にかなり広い畑があった。賢治が花巻農学校に就職(大正10年12月3日)するまでの数年間、花巻の自宅にいる間、裏の畑でいろいろな野菜「セロリー・パセリ・キャベツ・トマト・カブ・雪菜・カボチャなど」を栽培し、てんびん棒で家の便所からコヤシ(人糞尿)をはこびよく混ぜては畑に撒いたという(20)。

羅須地人協会時代に賢治が畑を耕し栽培したのは、その家庭菜園(ガーデニング)の延長であるように思える。佐々木(10)は、農業とは「農を生業とする職業」とするならば、賢治の農業は本来的意味で農業とは言えず、「一応の農業」としてしている。

羅須地人協会の設立

教師を辞めて羅須地人協会を設立（大正15年8月16日）したことは、賢治の「本当の百姓」になりたいたいの願望の表れであった。

最初の羅須地人協会講義は大正15年11月29日、協会定期集会は大正15年12月1日である（13）。羅須地人協会の講義や定期集会の参加者を見ると、ほとんど農学校の教え子や国民高等学校の参加者・篤農家たちである。

大正15年から昭和3年までの羅須地人協会の会員とそれに準ずるとされる参加者（賢治は同志と言っている）は、「花巻町・下根子桜・石鳥谷・湯本・湯口村・笹間村・真城村・八重畑村・向小路・東十二丁目」など近隣の比較的裕福な農民たちに限られ、その数わずか20余名（14歳～32歳：平均20歳）であった（30）。

羅須地人協会活動の実態

岩手日報の記事「新しい農村の建設に努力する」（大正15年4月1日）及び「農村文化の創造に努む」（昭和2年2月1日）で、賢治は羅須地人協会の設立趣旨を述べている。

「花巻で耕作に従事し生活即ち芸術の生がいを送りたい。幻燈会やレコードコンサートを催し、農作物の物々交換を行いしづかな生活を送りたい。」

「協会設立の趣旨は、農民の一大復興運動を起こすのが主眼で、毎年収穫時に同志が耕作で得た収穫物を持寄り物々交換の制度を取り、更に農民劇や農民音楽を創設して協会員は家族団らんの生活を続けて行くにある。協会員でオーケストラを組織し、毎月二、三回慰安デーを催す計画である。」

羅須地人協会設立の案内状（大正15年11月22日）（13, 14, 24）でも、「羅須地人協会には細かい会則や会費はなく、また入会資格もない。持ち寄り競売（本・絵葉書・楽器・レコード・農具・不要なもの）・種苗等の交換売買・レコード交換会・レコード鑑賞・オーケストラ・農民劇・農民音楽を計画。また同志を対象に羅須地人協会講義及び定期集会を開催する。」これが賢治が考えた羅須地人協会の活動内容であった。

農学校を辞めるとき「農民と同じ生活をする事によって農民と心を通わせ合い、新し農村を創りたい。」「農民生活を豊かにするために新し農民芸術を考えたい。」「おれたちはみな農民である ずるぶん忙がしく仕事もつらい もつと明るく生き生きと生活する道を見付けたい。」と言っている。

羅須地人協会の設立と活動の根底には、このような賢治の思いがあった。しかし賢治は「病氣（健康

問題）」と「陸軍大演習に伴うアカ狩り」のため、下根子桜から豊沢町の実家に戻り療養することになり、二度と下根子桜に戻ることはなかった（28）。羅須地人協会は、わずか2年4ヶ月（下根子桜の別宅に住んでいた時期：大正15年4月1日～昭和3年8月10日）で、賢治が望んだような成果（農民の一大復興運動）を上げることなく終わった。

羅須地人協会は、賢治（塾長）を頂点とする「縦の関係」「上下構造」であり、その活動は狭い地域に限定され横に広がることなかった。賢治は「農民と同じ生活をし、農民と心を通わせ合い、新し農村を創りたい。」と語っていたが、結局、賢治自身は小作民の中に身を投じて「本当の百姓＝小作人」になることはなく、賢治の願いと現実乖離していた。

稲作指導と肥料設計相談

羅須地人協会の活動は短期間で終息したが、その間に賢治が直接農民に対して行ったことは稲作指導・肥料設計であった。賢治は盛岡高農時代に土壤肥料学や地質学を修め、また花巻周辺の地質土性調査の経験から土壌の特性を熟知しており肥料設計は賢治が得意とする分野であった（13, 14）。

賢治は近郊の村々に「私設肥料設計相談所」を開設して「稲作指導」や「肥料設計」の相談に応じ、二千枚以上の肥料設計図を書いたといわれる（13, 14）。近村を巡回指導した肥料設計相談は、羅須地人協会時代の賢治が小作民と直接接触した唯一の場であった。

その肥料設計は、化学肥料に特化して開発された陸羽132号の栽培に対応したものであり、高価な化学肥料を使用できるのは裕福な農民に限られていた。賢治の肥料設計や稲作指導は画期的なことであったが、その当時の時代背景を考えると、小作民など零細貧農にとって経済的に容易に受け入れられるものではなかった。ところが、同品種は大正13年には既に岩手県の奨励品種となっており、花巻農会の職員によると「賢治のやったことは、当時（花巻）農会でもやっていました。陸羽132号だっってとっくにやっていました。何も（賢治の）特別なことはないですよ。」という（8, 28）。

このように賢治は羅須地人協会を設立し、農村を回り「稲作と肥料」について指導するという独自のやり方で「農民運動らしきこと」を行ったが、農村の中に入り小作民のために「農民を同志」として戦ったのではなかった。賢治は「農業技術者」であったが、貧しい「土の人」と同じ目線の「農村・農民指導者」とはなり得なかった（12）。

賢治「手をふれかけてそしてへばって止めた」

羅須地人協会の働きは、困窮する農村や農民生活の改善からはほど遠く、また賢治は相次ぐ深刻な早害早魃にも深い関心を抱くことはなく具体的な活動はみられなかったという(28)。

大正13年・14年はヒデリ(早害)の年であったが、大正15年はそれ以上のヒデリが襲い、稗貫郡一帯では早害早魃で大凶作となり、地元新聞で「ヒデリによる凶作」の様子が連日報道された。昭和2年・3年にも早魃や水害等で水稻の被害が重なった(6, 28)。

賢治は、当然、自分の足元で起っている農村の早害早魃の惨状をみて心痛み、農民の生活を少しでも楽にし「農民の生活に寄り添いたい。」との思いがあったであろう。ところが実態は違っていた(28)。

前記したように、大正15年1月～3月の間(花巻農学校在任中)には11回の国民高等学校講義を行い、4月1日に退職し羅須地人協会を設立した。最初の羅須地人協会定期集会は、大正15年12月1日で、それが終わると同12月2日には沢里武治に見送られて上京、年末の29日に帰花した。約1月間の長期滞京であった。

昭和2年1月・2月には羅須地人協会講義5回を行った。昭和2年11月頃には、曇の降る寒い夜、「沢里君、セロを持って上京してくる。今度はおれもしんけんだ、少なくとも三か月は滞在する、とにかくおれはやる。」と賢治は言い残し、沢里武治に見送られチェロを持って上京した。約3ヶ月間滞京しながらチェロを猛勉強したが、それがたたってか病気となり昭和3年1月頃に帰花した。漸次身体衰弱(28)。

昭和3年6月7日から24日まで仙台・水戸・東京・大島・東京と歩き回り、花巻を長期不在した(28)。同年8月10日には健康を害して下根子桜から実家に戻り療養生活に入った。

このように見てくると、大正13年から昭和3年頃には稗貫郡地域は早害早魃が続いたが、賢治はそのような早害早魃の大変な時期にも関わらずしばしば上京し故郷を長く留守にしていた。このような賢治の行動をどのように解釈したらよいのか。

早害早魃の非常時にこそ、賢治は郷里花巻に止まり地元稗貫郡内はもとより多くの農家が苦悩している紫波郡内の農民救済のために東奔西走したであろうと推察される。しかし実際はそうではなかった。賢治はこの時のヒデリや農民の苦労に具体的な行動を示していなかった。羅須地人協会時代の賢治は農民救済としての実践活動“農民運動”をしたという記録はないという(28)。

吉本隆明(28, 31)は「日本の農本主義者というのは、あきらかにそれは、宮沢賢治が農民運動に手をふれかけてそしてへばって止めたという、そんなていどのものじゃなくて、もっと実践的にやったわけですし、また都会の思想的な知識人活動の面でも、宮沢賢治のやったことというのはいわば遊びごとみたいなものでしょう。羅須地人協会だって、やっては止めでおわってしまったし、彼の自給自足圏の構想というものはすぐアウトになってしまった。その点ではやはり単なる空想家の域を出ていないと言えますね。しかし、その思想圏は、どんな近代知識人よりもいいのです。」「学校をやめて、お百姓さんのまねごとをするようになって」(23)と語っている。

羅須地人協会会員であった伊藤忠一(26)は「協会で実際にやったことは、それほどのことでもなかったが、賢治さんのあの“構想”だけは全く大したものだと思う。」と証言し、下根子桜の別宅で賢治と一緒に暮していた千葉 恭も「賢治は泥田に入ってやったというほどのことはなかった。」と語っている(28)。

伊藤忠一宛の謝罪の[書簡258](昭和5年3月10日)(4)で賢治は、「農事のこともおききたいことばかりですが四月はきっと外へも出られますからお目にかかれると思ひます。根子ではいろいろとお世話になりました。たびたび失礼なことも言ひましたが、殆んどあすこでははじめからおしまひまで病氣(こころもからだも)みたいなもので何とも済みませんでした。」とお詫びしている。つまり賢治自身は下根子桜時代の自身を振り返って、その活動は「はじめからおしまひまで病氣みたいなもので失敗であった。」と悔いて謝っている。

農学校の同僚であった阿部 繁(注1)は、次のように語っている(20, 21)。「科学とか技術とかいうものは、日進月歩で変わってきますし、宮沢さんも神様でもなし人間ですから、時代と技術を越えることはできません。宮沢賢治の農業というのは、その肥料の設計でも、まちがいはあったし失敗もありました。人間のやることですから、完全でないのがほんとうなのです。宮沢さんの場合、岩手県の農業を進歩させたとか、岩手県の農業普及に大きな功績があったというのではありません。宮沢さんは、決して試験場長でも育種研究家でもないのですから—。そして農業技術の方から見た場合は低くて貧しく、そしてまずい稗貫あたりの農業のやりかたを幾分でも進歩させ、いくらでも収穫量を高めたいということで、一生懸命やったので、岩手県の農業全般を高めたなどということではありません。そんなことで

はなく、宮沢さんの場合はもっと大事なことは、技術の根本にある、隣人を愛するという深い愛情にあることの方が、はるかに重大なことだと信じます。技術は変り進み、きょうはきのうのものが古いということが本態ですが、愛情だけは、古くもならず、使い物にならないなどということはありません。」

このように、阿部 繁は「賢治の農業は、人間のすることなので肥料設計でも間違いや失敗もあり完全でない。賢治が岩手の農業を進歩させ農業全般を高めたことはない。」と客観的に批評し、「賢治の場合、もっと大事なことは、技術の根本にある隣人を愛するという深い愛情であり、この方がはるかに重大なことである。」と証言している。

注1：明治31年3月15日、岩手県稗貫郡西宮野目で誕生。岩手県立盛岡中学校卒業後、久慈の農業補習学校の教員を振り出しに遠野実科女学校、花巻農学校に勤務した。後に稗貫郡宮野目農業共働組合長を務めた。

賢治の思い描いた農業とは

賢治は北海道のような新天地や大資本経営による小岩井農場のような近代的酪農経営などに関心を持ち、またアメリカの近代的な農業に憧れ、アメリカ移住も考えていた(10, 23)。

父政次郎は、賢治の考えを知ると「きさまは世間のこの苦しい中で農林の学校を出ながら何のぞまだ。何か考へろ。みんなのためになれ。錦絵(注：浮世絵)なんかを折角ひねくりまはすとは不届千万。アメリカへ行かうとの考へるとは不見識の骨頂。きさまはたうたう人生の第一義を忘れて邪道にふみ入つたな。」と賢治を叱責。賢治は「おゝ、邪道O、J ADO! O、J ADO! 私は邪道を行く」と自嘲的に叫んでいる[書簡15](4)。

これは、賢治が盛岡高農に在籍中(大正8年8月20日)保阪嘉内に宛てた手紙である。「賢治はアメリカ移住を模索していた。賢治が考えていた農業には高度に近代化され機械化され、情報化された農業の概念が含まれていた。そこには“農本主義の理念”はなかった」といえよう(10, 23)。

賢治が農業に本格的に関心を持ったのは農学校教師になってからである。それにしても賢治は農業や農村問題、そして農民救済には「本当の百姓」として積極的に踏み込むことはなかった。賢治は自分の専門分野である鉱物関係や化学工業的方面の自営業「宝石研磨販売・人工ダイヤ製造・木炭製造から出る煙から乾留物の利用・その他」を志していた(10, 23)。

農村の悲惨な状況と賢治の関心

大正13年・14年はヒデリ(旱害)の年であったが、大正15年はそれ以上のヒデリが襲い、稗貫郡一帯では旱害早魃で大凶作となり、地元新聞で「ヒデリによる凶作」の様子が連日報道された。昭和2年にも早魃や水害等で水稲の被害が重なった(6)。

賢治は、当然、自分の足元で起っている農村の早魃旱害の惨状をみて心痛め、農民の生活を少しでも楽にし「農民の生活に寄り添いたい。」との思いはあったであろう。その思いの一つの行動が、羅須地人協会時代の「稲作栽培指導と肥料設計」である。しかし羅須地人協会時代の活動は、「農民運動」まで発展することはなかった。賢治は農村農民の中に自ら深く入り共に働くとの考えはなく、「本当の百姓：小作人」にはなれなかった。羅須地人協会の働きは困窮する農村や農民生活の改善からはほど遠く、現実の農民生活の改善にはあまり関わっていなかった。

賢治は農に殉じたのか

「農は万業の大本である」「農は立国の元である」との農民・農業第一主義の思想、いわゆる「農本主義」は、農民(小作人)と共に農民の立場に立って生き「農民を救済し農に殉じる」ことである。後に述べる松田甚次郎は、その意味で「農本主義者」であったが、賢治には「農本主義の思想」はなかったという(9, 22)。

賢治は「賢治菩薩」「聖人」「農聖」「聖農」「義農」であるとの「賢治礼讃」がみられ、また賢治の行為を崇拜し、賢治作品は全て傑作であると盲目的に賞讃されることもあった(25)。そのように讃えられるのは、賢治の「神格化」であり「美化された賢治像」あるといえよう。

賢治は農に殉じた「農聖」であったのか。この間に対して佐々木多喜雄は、賢治「農聖伝説」考(9)で『賢治の「農聖」の呼称は全く根拠のない賢治の伝説化・神格化・神話化の一環からくる結果としての「農聖伝説」であって、賢治は「農聖」とは言えないと結論される』、『賢治には後世に残し伝える程の農業上の事蹟は無い』と断定している。

「百姓甚次郎」の農民運動： 「小作人」になった甚次郎

全ては甚次郎と賢治の出会いから始まった。

甚次郎は新庄鳥越部落から、盛岡高等農林学校農業別科に入学するために来盛(大正15年3月)、賢

治と偶然に出合い（昭和2年3月8日）、賢治の教えに従い郷里に戻り百姓（小作人）となった。甚次郎は賢治の思想精神を實踐して「農民運動」を展開し農村指導者として生涯活躍することになる（6-8）。

甚次郎は農学別科卒業間近に、花巻に賢治を訪ねた。賢治が「本当の百姓」になろうと農学校を辞職して下根子桜の「羅須地人協会」で過していた時であった。甚次郎が賢治を訪ねた時、賢治は「君たちはどんな心構えで帰郷し、百姓をやるのか。」と尋ねた。それに対して甚次郎は「学校で学んだ学術を、充分生かして合理的な農業をやり、一般農家の範になりたい。」と模範的な返事をしたところ、賢治は足下に「そんなことでは私の“同志”ではない。君たちに贈る言葉はこの二つだ—小作人たれ・農村劇をやれ—」と力強く諭された。

帰郷した甚次郎は、迷うことなく学生服を脱ぎ捨て農装に衣替えした。「農装の姿で活動を始めた時の嬉しさと、父から六反歩の早魃田を許された時の喜びは何と言つて言ひ現してよいかわからぬ。」「我が郷里・我が墳墓の地・揺籃の地、こゝに理想の源・愛の泉があり、この鳥越を愛し讃へんとして奮起した。」と、その時の心情を述べている。賢治の諭しは勿論、百姓になる喜びと郷里讃美こそ、百姓甚次

郎の「農民運動」の原動力であった。

甚次郎の實踐：鳥越倶楽部と最上共働村塾

郷里に帰った甚次郎は、農民生活の向上と農村文化・芸術の確立に生涯をかけて取り組むことになる。甚次郎は賢治に誓った農村劇（村芝居）を實踐するため村の若者たちを集めて「鳥越倶楽部」を結成し、「水涸れ」をはじめ多くの農村劇を創作し演じた（10）。甚次郎の農村劇は、賢治が考えていた「新しい農民芸術」の實踐であり農民文化の創造であった。

甚次郎は、疲弊した農村農民の生活を守るために、「最上共働村塾」を開設。更に隣保館（共同記念館）の建築、託児所や共同施設の設置、消費組合の組織化、禁酒運動、婦人の地位向上（婦人愛護運動・母の会）、講習会・敬老会・夜間青年学校などに力を注ぎ、また衣類や味噌・醤油などの食品の自家生産や缶詰加工など自給自足的農業経営を實踐した（8）。

「最上共働村塾」は、自ら小作人（土の人・鋤の人）となった甚次郎の「農民運動」の基盤であった。「最上共働村塾」には県内外から多くの青年婦人たちが集まり、寝食労苦を共にするいわゆる「同じ釜の飯」を食う共同生活をした。

「土の人として共に働く：共働」が村塾の思想で



写真1 松田甚次郎像と義農松田甚次郎先生碑
山形県新庄市鳥越八幡神社境内
辞世の句「冬寒く雪降る奥羽の山里に道求めて茲に十八年」

あり、塾生一人一人の境遇や個性を尊重した。甚次郎を中心とした村塾の同志たちは「横の関係」「水平構造」にあり、その活動は波紋のように全国に広がった。その波紋の中心には甚次郎が尊敬する賢治がいた。最上共働村塾（昭和7年8月）は鳥越倶楽部（昭和2年4月）を含め約16年間継続した（8）。

なぜ一度の出会いで甚次郎は賢治を生涯の師としたのか

「賢治の論し」と「甚次郎の実践」

甚次郎は、農学別科卒業間近の昭和2年3月8日、下根子桜の「羅須地人協会」に賢治を訪ねた。この一度限りの「賢治との出会い」と「小作人たれ」「農村劇をやれ」との「賢治の論し」が、甚次郎の心を揺さぶり百姓として故郷の村で生きて行くことを決意させた。甚次郎は、賢治の訓えをひたむきに実践、「本当の百姓」として農村演劇を行いながら農村改革に身を捧げた。

賢治は甚次郎を「同志」と呼び、甚次郎は賢治を「生涯の師」と仰いだ。甚次郎は、「最上共働村塾」の真の塾長は賢治であり、「農民運動」の真の支柱は恩師賢治であるとした。昭和14年1月10日に落成した塾舎「土に叫ぶ館」が、同年5月27日に火事になり全てを失った。そのときでも「塾舎の焼失は大きな試練であり教訓である。多くの形あるものは失われ宇宙の微塵となり果てるが、燃やしても燃えないもの流しても流れない金剛があることを教えられた。全てを失ったが、不死の塾長（注：宮澤先生）が居るのだ。」「明日からでも働ける。明朝からも祈り、参拝も出来る。大きな教えと導きを受けていただいたのだ。」（8, 16, 17）と語り、再建した塾舎（昭和14年12月3日落成）2階の間を宮澤先生の仏間とし、故宮澤賢治先生を塾長として善き師として仰ぎ精進すること」を誓っている（17）。

甚次郎は賢治の訓えを終生の信条とし、「土の人」となり土を愛し救農に生涯を捧げた。最後には「大旱魃で雨乞い祈願」のため八森権現に登り体調を崩し（昭和18年7月9日）、それが引き金となり病床に臥し急逝した（8月4日）（17）。甚次郎は自ら小作人になり賢治精神を最後まで実践した「義農」であるといわれる（写真1）。

賢治と甚次郎の邂逅

2人の邂逅は奇跡的なことである。何故、賢治は甚次郎に対して熱く論し語ったのか？ 賢治の身近にいた多くの青年農民たちではなく、見も知らない

異郷の甚次郎であったのか？ 賢治の周りには多くの青年達がおりに、また賢治は農学校の生徒達に常日頃「農村に帰れ、農民になれ」と語っていた（24）。その中に甚次郎のように賢治の言葉に従った人物はいなかったのか？ 賢治は、何故、一度しか会わない甚次郎に力強く断固とした口調で論じたのか？ その様子は、想像していた賢治と違い、違和感を覚えほどである。

賢治は「本当の百姓」になりたいと願ったが、甚次郎には「農民として真に生きるには、まず真の小作人たることだ。・・・黙つて十年間、誰が何と言はうと実行し続けてくれ。そして十年後に、宮澤が言つた事が真理かどうかを批判してくれ。今はこの宮澤を信じて、実行してくれ。」と説諭した（8, 15）。

このように2人が出会った時に、賢治は「本当の百姓」を甚次郎に托した。甚次郎は賢治の思いを引継ぎ「本当の百姓」になり、賢治の思いを実践した（図1）。事実、甚次郎は最上共働村塾などの活動を10年間実践し、昭和13年11月13日、その報告のために花巻を訪れ賢治の墓（賢治詩碑）に詣でた。

「私は宮澤賢治先生の一弟子である。そして私には先生と満十年の一約定があつた。それは小作人たれ・農村劇をやれ、その説明は為さないけれどもそれを実行したならば十ヶ年後には必ず報告してくれよとの事であつた。昭和十三年はもう満十ヶ年である。」「この先生の弟子である私共余りに先生の教を守れなかつた。十年間黙つて俺の言う事を実行して見てから、その結果を報告せよといはれたのであつたが、余りいい報告も出来なかつた。」（8, 16）。これは賢治詩碑の前で語った甚次郎の自戒である。甚次郎のひたむきな姿には心打たれるものがある。

賢治と甚次郎の霊的交流と賢治の法華経信仰

賢治は靈感の人で直観力が優れ、大宇宙と交感する能力をもっていたといわれる（29）。賢治と甚次郎が出会った時、賢治は熱く論し甚次郎はそれに応えた。たった一度の出会いであつたが、2人は同じ魂の振動数を持ち、お互いの魂は交流し共鳴（注1）した（図1）。甚次郎の魂は賢治の汎宇宙的生命世界（法華経的世界）において共鳴するものがあつた（17-19）。賢治の「魂の叫び」が「甚次郎の心琴」にふれ、その生涯を決定づけた。

注1：振動体はその固有振動数に等しい外部振動の刺戟を受けると、振幅が増大する現象。例えば振動数の等しい2つの音叉の一方を鳴らすと、他方も鳴る現象である。「心の“琴線”に触れる」や「以心伝心」も、ある種の共鳴現象である。

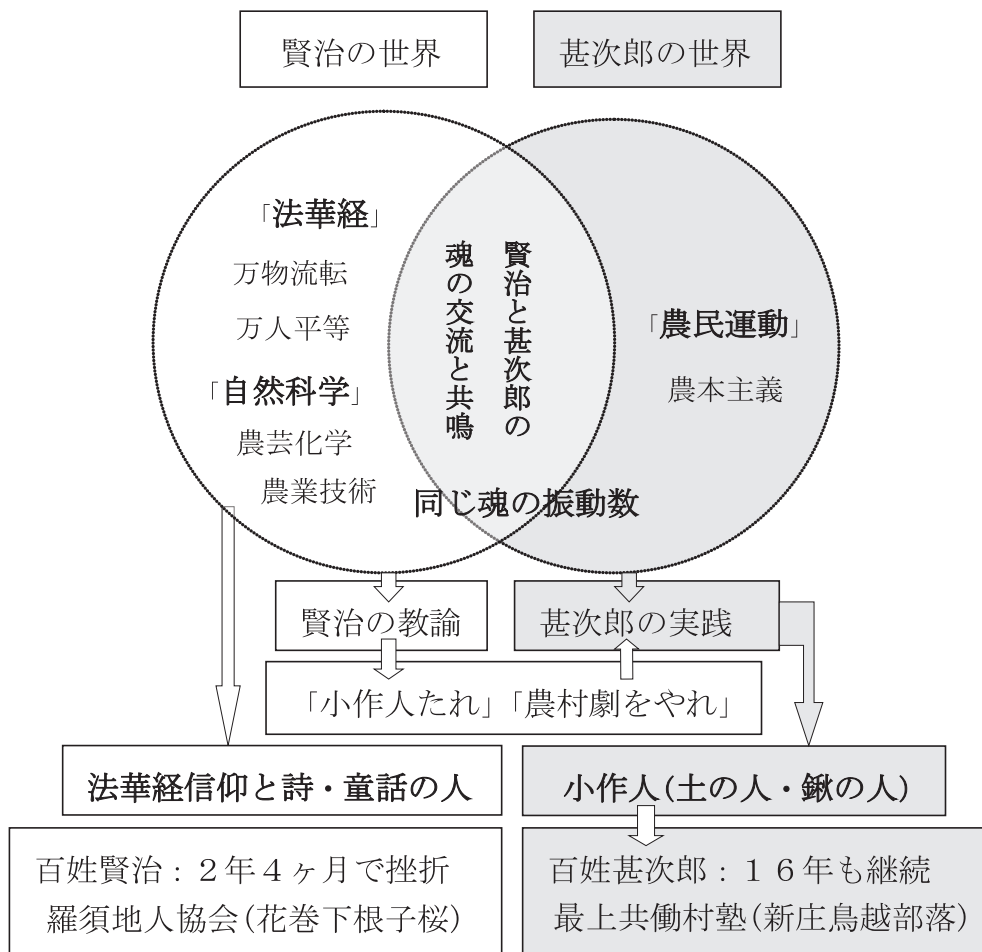


図1 汎宇宙的生命世界（法華經的世界）における甚次郎と賢治の交流と共鳴

賢治の生涯には、三つの世界：信仰（法華經による自己救済と衆生救済）、文芸（詩と童話：信仰と文芸とは不可分な関係）、自然科学（農芸化学・農業技術指導：農業指導や羅須地人協会の活動）（図1）があった（27）。

賢治は羅須地人協会を設立し「本当の百姓」になろうとしたが、それは叶わず農民運動まで発展することはなく、法華經信仰と詩と童話の世界を歩んで行った。後に取り上げるが、法華經信仰が賢治を文学へと導く起動力となった。

寒冷地東北の農業農村は疲弊し、一個人の努力とか献身では到底解消できない困難な社会問題であることは事実であった。そのため羅須地人協会時代の賢治の農業活動は、いろいろ事情があったにせよ「手をふれかけてそしてへばって止めた程度」であり、現実にはなんら問題解決に至らなかったとしても、やむを得えなかったであろう。

それでも「雨ニモマケズ手帳」（5）の詩から、賢治は生涯農村問題を「最後の目標」としていたことが窺える。賢治は「デクノボー」と自称し、病氣や政治社会の風潮（社会主義思想弾圧）と戦いなが

らも常に「法（法華經）を先」とし、「法華經信者」として衆生のことを思い続けた。

法を先とし
 父母を次とし
 近縁を三とし
 農村を最後の目標として
 只猛進せよ
 利による友
 快樂を同じくする友
 尽く之を遠離せよ

昭和8年、この年の稗貫郡は久しぶりの大豊作であった。収穫の秋（9月17日～19日の3日間）には花巻祭り（鳥谷ヶ崎神社の秋祭り）が盛大に行われた。その祭りを見ながら、病床にあった賢治は2首の詩を書いた（5）。絶筆となったこの詩は、「稗貫郡の大豊作を喜び、病にある身であるが、その命を衆生のためによろこんで捨てよう。」との賢治の願いであり祈りであった。

死の直前の詩（昭和8年9月20日）

方十里稗貫のみかも
稲熟れてみ祭三日 そらはれわたる

病のゆゑにもくちん いのちなり
みのりに棄てば うれしからまし

賢治の一生は菩薩行の実践（法華経信仰）であり、他人の幸福のために己を犠牲にすることを願った。

「いゝえ。私の命なんか、何でもないんです。あなたが、もし、もっと立派におなりになる為なら、私なんか、百ぺんでも死にます。」（3）

甚次郎は生前、自分の遺骨を賢治のそばに埋葬されることを望んだという。花巻の宮澤家の了承のもと、甚次郎の遺骨は分骨されて賢治詩碑の横に埋葬された（17）。甚次郎と賢治の魂は、ともに時空を超えて銀河宇宙で永遠に交流しているであろう。まさに甚次郎の生涯は賢治を追いかけた軌跡であった。南無妙法蓮華経。合掌。

今回は賢治と妙法蓮華経信仰について述べる。

参考資料

- 1) 宮沢賢治全集 1、ちくま文庫、539-542/156-159（昭和61年2月）
- 2) 宮沢賢治全集 2、ちくま文庫、299（昭和61年4月）
- 3) 宮沢賢治全集 5、ちくま文庫、119-126（昭和61年3月）
- 4) 宮沢賢治全集 9、ちくま文庫、212-213/286-287/356-357/359-360（平成7年3月）
- 5) 宮沢賢治全集10、ちくま文庫、37-83（平成7年5月）
- 6) 北水会報 第142号（令和4年1月）
- 7) 北水会報 第143号（令和4年12月）
- 8) 北水会報 第144号（令和5年8月）
- 9) 宮沢賢治小私考—稲品種改良分野からのアプローチ—：佐々木多喜雄、北農 73（1）、84-98（平成18年1月）
- 10) 宮沢賢治小私考—賢治「農聖伝説」考（承前2）：佐々木多喜雄、北農75（2）、69-80/163-174（平成20年4月）
- 11) 宮沢賢治小私考—賢治「農聖伝説」考（承前4）：佐々木多喜雄、北農 75（4）、331-341（平成20年10月）
- 12) 宮沢賢治小私考—賢治「農聖伝説」考（承前5）：佐々木多喜雄、北農 76（1）、91-107（平成21年1月）
- 13) 宮沢賢治—地人への道—：佐藤 成、川嶋印刷、270-271/258-327/316-357/392-393（昭和59年10月）
- 14) 宮沢賢治の五十二箇月—教師としての賢治像—：佐藤 成、川嶋印刷、149-168/245-349（昭和61年1月）
- 15) 土に叫ぶ：松田甚次郎、羽田書店、3-4（昭和13年5月）
- 16) 村塾建設の記：松田甚次郎、実業之日本社、81/68/123（昭和16年1月）
- 17) 賢治精神の実践—松田甚次郎の共働村塾—：安藤玉治、農村漁村文化協会、157/166/221-231（平成4年7月）
- 18) 地獄の思想—日本精神の一系譜—：梅原 猛、中公文庫、204-232（昭和58年9月）
- 19) 「森の思想」が人類を救う：梅原 猛、小学館、106-108/220-237（平成3年10月）
- 20) 野の教師 宮沢賢治：森 荘巳池、普通社、179-188/240-242（昭和35年11月）
- 21) 宮沢賢治の肖像：森 荘巳池、津軽書房、82-83（昭和49年10月）
- 22) 宮沢賢治：吉本隆明、筑摩書房、42-61（昭和64年7月）
- 23) 宮沢賢治の世界：吉本隆明、筑摩選書、335-340（平成24年8月）
- 24) 年譜 宮沢賢治伝：堀尾青史、図書新聞社、167-174/203（昭和41年3月）
- 25) 宮澤賢治論：西田良子、165-166（昭和56年4月）
- 26) 私の賢治散歩 下巻：菊池忠二、新生会、35（平成18年3月）
- 27) 宮沢賢治：千葉一幹、ミネルヴァ書房、263-271（平成26年12月）
- 28) 本統の賢治と本当の露：鈴木 守、2-90（平成30年4月）
- 29) 同窓生が語る宮澤賢治—盛岡高等農林学校と宮澤賢治—120年のタイムスリップ：若尾紀夫著・編、岩手大学農学部北水会、杜稜高速印刷、232（令和3年7月）
- 30) 「羅須地人協会」の会員等一覧：みちのくの山野草（goo.ne.jp）
<https://blog.goo.ne.jp/suzukishuhoku/e/c381f738d116147a73196790815366e6>
- 31) 賢治はいかほど東奔西走したのか：みちのく山野草（goo.ne.jp）
<https://blog.goo.ne.jp/suzukishuhoku/e/5e08e945d22b80b8817f5fcd31c79811>